

30周年記念号に寄せて

学長 岸 正倫

2000年春愛知江南短期大学は開学30周年を迎え、この記念の年に30周年記念号の紀要を発行します。

本学は1970年4月林学園女子短期大学としてスタートし、この30年の間に学科の改組と新設を行って、第1部4学科と第3部1学科の5学科編成にまで成長しました。この間に校名を2度変更しました。教員の専門分野は人文科学、社会科学、自然科学から家政学、芸術、体育、医療、福祉にわたります。

初代学長二國二郎が紀要発刊に際して「研究者は、研究成果を専門学会誌に発表する義務がある。本紀要の将来は、専門学会誌では受け入れの困難な、長大なもの、図表の多いものの原報と、紀要発行期間中に本学教員によって各専門雑誌に発表された報文の要旨の二本立てになると考えている」と述べ、さらに、校名を変更した年の紀要第10号で「私共は一大決心の下に、校名を江南女子短期大学と改め、地域社会の文化の発展に一層の努力を注ぐことを誓った。本紀要が、この決意の直接の表明として、一段の向上を示すことを衷心希望する」と述べていますが、現在でも本学紀要の目的と使命に基本的な変化はないでしょう。

紀要に発表された論文の全リスト（本誌143 - 182ページ参照）を通覧すれば、本学教員の教育研究分野が本学の成長に合わせて広がってきたことが分かります。地域社会の文化の発展に寄与する姿勢も紀要に顕示されています。博士論文へ発展した論文もあります。また、紀要編集委員会が校閲をはじめとする委員会任務を全うするべく努力してきたことが個々の論文からうかがえます。本学教員の教育研究に対する熱意が紀要に表出されていると言えるでしょう。

さて、レフェリー制度をとっていない紀要はレフェリーと編集委員会による審査を伴う専門学会誌より低位に位置づけられ、これが質を高める努力をとかく阻害し、サーキュレーション拡大を困難にしています。しかし専門学会誌の多くには、速報的なものは別として、投稿してから活字となるまでの待ち時間が長いという弱点があります。紀要はこの弱点を補うことができるでしょう。本学教員各自が、研究成果を公表する貴重な場が提供されていることを自覚し、紀要編集委員会と協力して紀要の果たすべき役割を担えば、本学紀要の評価向上に貢献できるでしょう。

一方、情報通信技術の進歩によって教育研究環境が大きな変化の途上にあることが見逃せません。この変化がどんな影響を紀要に与えるでしょうか。本学でも情報通信技術を利用できる環境を整備しました。瞬時の情報伝達を可能にする環境の活用が、研究の遂行を助け、他の教育研究機関の研究者との共同研究をも後押しするでしょう。紀要の向上がもたらされることを期待します。